United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization

Member of UNESCO Associated Schools

ユネスコスクール事業

第７回ESD国際交流プログラム

報告書

主催：　公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

協力：　株式会社三菱東京UFJ銀行

目　次

1.　ごあいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

2.　実施概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3.　参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

4.　日　程　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

5.　報告事項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

6.　参加者報告書～帰国後の振り返り・・・・・・・・・・・・・・・・・21

宮城県仙台二華高等学校　相沢　咲希
大阪府立北摂つばさ高校　荒木　千尋
晃華学園高等学校　石原　さよ
広島県立安古市高等学校　香川　美咲
広島県立呉三津田高等学校　神田　実鈴
岡山県立矢掛高等学校　田口　靖浩
群馬県立利根実業高等学校　萩原　健輔
愛媛県立新居浜南高等学校　古川　若奈
岐阜県立池田高等学校　松岡　光龍
福島県立安達高等学校　安田　百花
奈良女子大学附属中等教育学校　山根　颯真
福岡県立ひびき高等学校　渡邊　七海

名古屋市立名東高等学校　教諭　板垣　真由美（団長）

7.　事後活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

8.　その他・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

ごあいさつ

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

会　長　　大　橋　洋　治

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」。日本で始まった民間ユネスコ運動は、この一文で始まるUNESCO憲章の精神から生まれました。

憲章前文ではさらに、「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった」「よって平和は、失われないためには、人類の知的及び精神的連帯の上に築かれなければならない」とうたわれています。

こうした憲章の考えに基づき、私ども日本ユネスコ協会連盟では、将来を担う高校生の皆さんが海外での経験を通して広い世界を知り、持続可能な社会のあり方について、海外で見識を広めることは、平和で持続可能な社会の構築に不可欠であると考え、三菱東京UFJ銀行のご協力をいただき、「ESD国際交流プログラム」を実施してまいりました。

参加された12名の高校生の皆さんはインドネシア滞在中、日本と異なる気候、風習や生活、さまざまな立場の方々に出会い、多くの刺激を受けられたことと思います。学んだことを大いに生かし、将来、広い視野を持って社会に貢献する人材に成長されることを願ってやみません。

最後になりましたが、このプログラムは三菱東京UFJ銀行のユネスコスクールに対するご理解と多大なるご貢献によって可能となりました。また日本ユネスコ国内委員会、在ジャカルタ日本国大使館、三菱東京UFJ銀行ジャカルタ支店、UNESCOジャカルタ事務所、インドネシア・ユネスコ国内委員会など多くの関係者の皆さまの温かいご好意によって、内容豊かなものとなり、高校生たちには大変貴重な機会をご提供いただきました。この場をお借りして関係各位に心より感謝申し上げます。

１．実施概要

主　催

公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟

協　力

株式会社　三菱東京 UFJ 銀行

後　援

日本ユネスコ国内委員会

事業の趣旨

持続可能な社会作りの担い手育成を目的に、ユネスコスクールの高校生を海外研修に派遣することで、日本の若者がさまざまな体験を通して学びを得る機会を提供する。海外のユネスコスクールや UNESCO 地域事務所訪問などのプログラムから、参加者が UNESCO の理念への理解を深め、帰国後に体験したことを校内や地域で発信するなど、より良い ESD 活動に生かすことを目指す。具体的には

(1) インドネシアにおける ESD の優れた実践活動を学ぶこと。
(2) インドネシアの同世代の学生と友好を深めること。
(3) UNESCO ジャカルタ事務所を訪問し、UNESCO に関する理解を深めること。
(4) 視察を通じて、訪問国の文化や歴史、人々の生活を知ること。またインドネシアで活躍する日本の方々との面会を通じて、日本とインドネシア両国の関係について理解を深めること。

スケジュール、主な訪問先　（詳細は P4 のとおり）

2017 年 3 月 24 日（金）事前研修会（於：都内）
2017 年 3 月 25 日（土）出発日、インドネシア・バンドンへ移動
2017 年 3 月 26 日（日）バンドン市内視察（アジア・アフリカ会議博物館、インドネシア教育大学教育博物館、アンクロン・ウジョ）
2017 年 3 月 27 日（月）JAYAGIRI センター訪問、Geger Sunten CLC 活動視察
2017 年 3 月 28 日（火）バンドン→ジャカルタへ移動、
タマンミニ訪問、ジャカルタ市内視察
2017 年 3 月 29 日（水）ユネスコスクール（SMK Negeri 27）訪問
2017 年 3 月 30 日（木）日本大使館、三菱東京 UFJ 銀行ジャカルタ支店、UNESCO ジャカルタ事務所訪問、帰国日
2017 年 3 月 31 日（金）帰国（到着日）、解散

参加高校生への課題

(1) （事前準備・プログラム中）各校のESDの取り組みを英語で発表
バンドンのGeger Sunten CLCやジャカルタのユネスコスクール及びUNESCOジャカルタ事務所で発表し、現地参加者と意見交換　＊CLC=Community Learning Center

(2) （事前準備・プログラム中）文化交流の準備及び当日の披露

(3) （プログラム中）生徒間で役割分担を設け、それぞれが責任を持って担当

(4) （帰国後）A4用紙1枚を目安として、報告書を提出

(5) （帰国後）1回以上の帰国報告会の開催

2．参加者名簿

参加生徒

※学年は派遣当時

No.	氏名	学校名	所在地	学年	性別
1	相沢　咲希	宮城県仙台二華高等学校	宮城県	1	女
2	荒木　千尋	大阪府立北摂つばさ高校	大阪府	2	女
3	石原　さよ	晃華学園高等学校	東京都	1	女
4	香川　美咲	広島県立安古市高等学校	広島県	2	女
5	神田　実鈴	広島県立呉三津田高等学校	広島県	2	女
6	田口　靖浩	岡山県立矢掛高等学校	岡山県	2	男
7	萩原　健輔	群馬県立利根実業高等学校	群馬県	2	男
8	古川　若奈	愛媛県立新居浜南高等学校	愛媛県	2	女
9	松岡　光龍	岐阜県立池田高等学校	岐阜県	2	男
10	安田　百花	福島県立安達高等学校	福島県	2	女
11	山根　颯真	奈良女子大学附属中等教育学校	奈良県	1	男
12	渡邊　七海	福岡県立ひびき高等学校	福岡県	2	女

引　率

No.	氏名	所属	性別
13	宮坂　充	三菱東京UFJ銀行コーポレート・コミュニケーション部	男
14	板垣　真由美	名古屋市立名東高等学校　教諭	女
15	古澤　真理子	公益社団法人日本ユネスコ協会連盟　国内事業部	女

3. 日　　程

	日付	テーマ		内容
0	3月24日 （金）		13:00 18:30 20:00	前日研修会（JALシティ田町）（～18:00） 壮行会 閉会　　宿泊：JALシティ田町
1	3月25日 （土）		6:45 10:15 15:55 17:30 22:30	ホテルで朝食後、電車で羽田空港へ移動 羽田空港発（NH855便） スカルノ・ハッタ空港（ジャカルタ）着 空港発、バンドンへ移動（車で約5時間） 途中、空港近くのレストランで夕食 ホテル着　　宿泊：ガーデン・パルマータホテル
2	3月26日 （日）	「世界の記憶」 「無形遺産」を知ろう	8:30 9:00 11:00 15:30 18:30	ホテルで朝食後、出発 アジア・アフリカ会議博物館　視察 インドネシア教育大学教育博物館 昼食 アンクロン・ウジョ訪問（～17:30） 市内レストランで夕食後、ホテルへ 宿泊：ガーデン・パルマータホテル
3	3月27日 （月）	ESD優良事例を知ろう	8:00 8:45 11:30 13:30 17:30 21:30	ホテルで朝食後、出発 JAYAGIRIセンター訪問（場所：レンバン） 昼食 Geger Sunten CLC　活動視察 学習者、地元の方々と交流（～17:00） Geger Sunten CLC　発 市内レストランで夕食 ホテル着　　宿泊：ガーデン・パルマータホテル
4	3月28日 （火・祝）	インドネシアを知ろう	7:30 10:00 11:30 12:00 午後 18:30 20:00	ホテルで朝食後、出発 タマンミニ着 タマンミニ発 昼食 ジャカルタ市内視察（～16:00） モナス、イスティクラル・モスク、カテドラル ホテルにチェックイン 市内レストランで夕食 ホテルに戻った後、該当者はプレゼンテーションの練習 宿泊：グランド・サヒッド・ジャヤホテル
5	3月29日 （水）	インドネシアの高校と交流しよう	8:00 8:35 16:00 16:15 18:00 20:30	ホテルで朝食後、出発 ユネスコスクール(SMK27) 訪問 コタ地区視察 ユネスコスクール発 市内視察　（～17:15） 市内レストランで夕食 ホテル戻った後、該当者はプレゼンテーションの練習 宿泊：グランド・サヒッド・ジャヤホテル
6	3月30日 （木）	日本とインドネシアの関係を知ろう（外交、経済） 国際機関を訪問しよう	8:30 9:00 11:30 14:00 16:30 17:30 19:00 19:25 21:25	ホテルで朝食後、出発 日本大使館表敬訪問 三菱東京UFJ銀行訪問 ユネスコ・ジャカルタ事務所訪問 ユネスコ・ジャカルタ事務所出発 空港近くのレストランで夕食 レストラン発 空港着 ジャカルタ発（NH856便）
7	3月31日 （金）		7:10	羽田着 解散

※　3月27日バンドンでは、インドネシア教育大学生レギさんに、3月29日ジャカルタでは、アユさん（インドネシア大学大学院卒業生）に日本語・インドネシア語の通訳としてお手伝いをいただきました。

４．報告事項

(1) 事前研修会

研修成果がより充実したものになるよう、出発前日に、都内ホテルで事前研修会を行った。研修会では日本ユネスコ協会連盟の鈴木佑司副理事長(現理事長)からUNESCOや日本ユネスコ協会連盟の説明を、三菱東京 UFJ 銀行・コーポレート・コミュニケーション部の宮坂充上席調査役より同社の行う社会貢献活動（CSR）活動についての説明を受け、主催・協力団体の活動についての理解を深めた。

研修会の模様

さらに、訪問先のユネスコスクールなどで発表する、各校の ESD 活動についてのプレゼンテーションの練習を行った。団長の板垣真由美先生が各生徒のプレゼンテーションにコメントをし、生徒たちはフィードバックをもとに内容をよりよいものに修正した。

また、第 4 回期（2014 年 3 月実施）参加者の好中奈々子さん（山口県高水高校出身、慶應義塾大学）から、自身の経験を踏まえ、プログラム中の心構えなどについてアドバイスや、本プログラムを通して学んだこと、その後の自分の進路選択などに与えた影響などについて話を聞いた。

(2) Jayagiri　センター

Jayagiri センターは、1961 年にインドネシアの国家教育文化省のもとで設立された、幼児教育・ノンフォーマル・インフォーマル教育の発展を目的としたセンター。

バンドンのレンバンにあるオフィス到着後、センター所長やプログラムオフィサーの Tintin 氏などから、センターの活動概要などの説明を受けた。

同センターは、ESD を主軸に捉えた幼児教育や職業訓練、識字教育をはじめとする多彩な教育プログラムを展開しているとして、2015 年に UNESCO/日本 ESD 賞を受賞している。同センターの管轄する CLC では、地域文化と伝統、環境、地域経済の活性化をめざし、経済・社会・文化の側面を網羅するよう意識したプログラムが行われている。

例えば、CLC では、伝統人形のワヤンを作るプログラムがあるが、ワヤンを作り、演じ、その人形を販売することは、伝統文化の継承にもつながり、収入向上にも結び付くこと、またワヤンで主に演じられる「マハーバーターラタ」のお話を通じて、ヒンズー教徒について理解を深める機会にもなるとのことだった。

センターの活動概要の説明を受けた後、研修施設としても機能をもつ敷地内を見学し、同施設で行われている保育園と母親学級の様子を見学した。

Jayagiri センター入口

Muhammad Hasbi　所長(写真中央)

センターの活動概要について説明。

母親学級を見学

(3) Geger Sunten CLC

Jayagiri センターが管轄する、CLC のうちの一つである、Geger Sunten CLC を訪問し、参加高校生と同年代の CLC 学習者と交流をした。

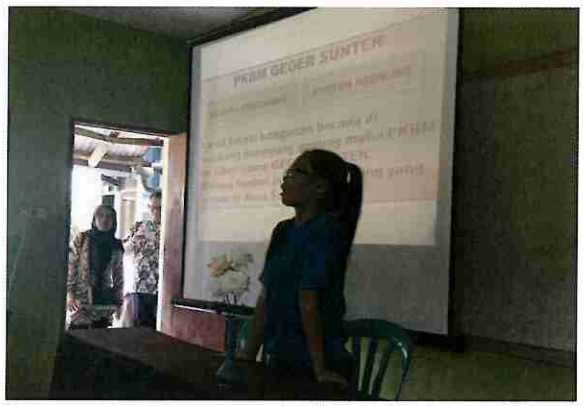
CLC 入口

① インドネシア側発表

Geger Sunten CLC は、2005 年にできた、幼児教育や識字教育、ライフスキルなどを学ぶことができる、ノンフォーマル教育のセンター。

当日は、パッケージ C の学習者（日本の高校レベル）が Geger Sunten CLC の概要について発表してくれた。「パッケージ」というのは、正規の教育をドロップアウトした子どもたちのためのプログラムで、CLC でパッケージ A(小学校に相当)、B(中学校に相当)、C(高等学校に相当)の学習を修了する

と、正規の学校に編入できるシステム。
2015 年以来、CLC では、7000 人の学生が卒業した。
地域には、学校をドロップアウトした子が多くて、パッケージ A、B、C は年齢に関係なく、CLC で勉強を続けることができる。パッケージのプログラムでは、収入向上に結びつくようなライフスキルとして、バラ栽培の方法やコーヒーの入れ方を学んだり、伝統舞踊を学んだりすることもできる。



パッケージ C 学習者

パッケージ C を終えると就職したり、中には進学したりする人もいるとのことだった。

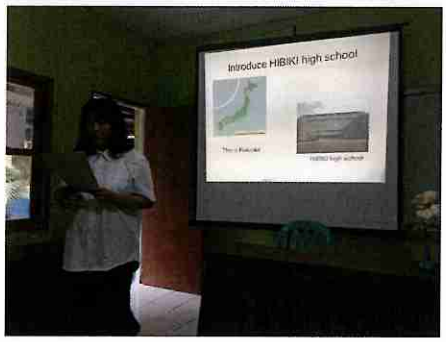
② 日本側プレゼンテーション

・ 神田　実鈴（広島県立呉三津田高等学校）
40 歳になった私たちが，地元呉にどう貢献できるかについて「社会探究プロジェクト学習」を通じて考えたことを発表。

・ 田口　靖浩（岡山県立矢掛高等学校）
幼いことから取り組んでいる備中神楽について、興味を持ったきっかけから伝統文化の継承についての自分の思い、考えを発表。

・ 古川　若奈（愛媛県立新居浜南高等学校）
地域産業遺産である別子銅山について学び、それを小学校など地域に発信する活動や銅山跡地を巡る観光ツアーの実施などを通して、自分たちの住む街を見直し、考えたことを発表。

・ 渡邊　七海（福岡県立ひびき高等学校）
北九州の公害克服の歴史について、地域と行政・企業の取り組みを調査・聞き取りした内容を「エコライフステージ２０１６」で発表した経験などを発表。



③ インドネシア学習者、日本側参加者間で出た質問

Q: 日本でライフスキルで作ったものは売るのですか？

A: 作ったものは地元の小学校で作り方を教えてあげたり、施設にあげたりしている。

Q:日本の学校は毎日ありますか。

A：月曜日から金曜日まで。進学するための学校は土曜日まである。

Q：ここ(CLC)で人気の将来の職業や何ですか？

A：ビジネスマン。

Q：日本では、公民館はどう使われていますか。

A：祭りの練習などコミュニティの人が集まる場として使っている。

Q:Geger Sunten CLC で学ぶことを選んだ理由は何ですか？

A:年齢に関係なく入れるから。自分のやりたいことが学べるから。

上記の他、日本は文化保存に対する政府の支援の有無、日本での人びとの伝統文化への関心の程度などについて、質問があった。

④ 文化交流

日本側参加者から、空手や備中神楽の実演を披露した。インドネシア側からは伝統舞踊が披露された。また、日本から持参した折り紙やあやとり、コマなどを CLC 学習者に紹介し、一緒に楽しんだ。

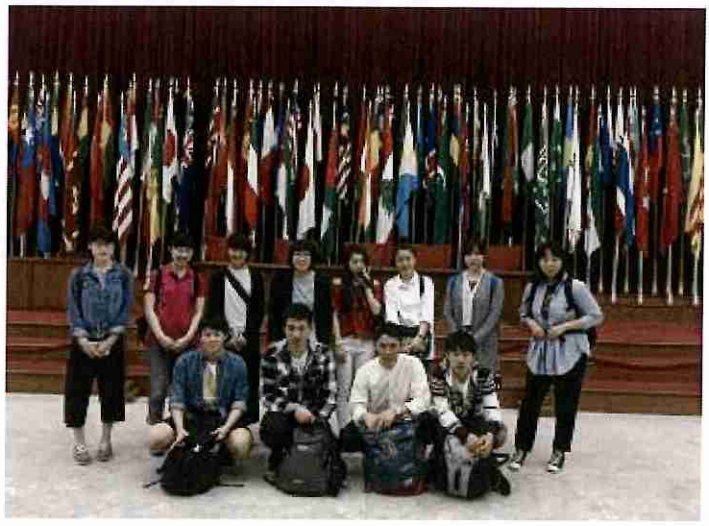
インドネシアからは伝統舞踊の披露

日本から空手や備中神楽の披露。
日本から持参した折り紙やあやとり、こまなどを紹介。左は、Geger Sunten CLC の所長

(4) アジア・アフリカ会議博物館

1955 年に「アジア・アフリカ会議」が開催され、世界平和と協力の推進に関する宣言「バンドゥン 10 原則（ダサ・シラ・バンドゥン）」が採択された場を博物館として公開している。

アジア・アフリカ会議に関する文書、写真、フィルムは、2015 年に UNESCO の事業の一つである「世界の記憶(Memory of the World)」に登録されている。実際に会議が開催された場所など、歴史に残る会議が行われた場所を記録映像などと共に見学をした。



1955 年の会議開催場で撮影

(5) インドネシア教育大学教育博物館

インドネシア教育大学附属博物館では、インドネシアの先史時代から現代のまでの教育の歴史を学ぶことができる。訪問日の3月26日(日)は、休館日のところ、特別に見学させていただいた。

日本統治時代には、日本の教育制度や制服が導入され、インドネシア国内の教育の質の向上が図られたと説明があった。

同大学の学生が館内を案内（左）

(6) アンクロン・ウジョ

西ジャワ州を起源とする民族楽器、アンクルン。アンクロンが奏でる複数のハーモニーに、協力・尊敬などの社会的協調を促進する文化の礎が秘められている、という理由から、2010年に、世界無形文化遺産に登録されている。ウジョ氏が率いる「アンクロン・ウジョ」で、実際に参加者もアンクロンを手にとり、体験演奏をした。

アンクロンは竹筒を揺り動かして、音色を響かせる

(7) SMK Negeri 27 Jakarta（ユネスコスクール）

ジャカルタ市内の職業高校。ユネスコスクール登録校。

学校に到着後、楽器や伝統舞踊のパフォーマンスによる、盛大な歓迎を受けた。

歓迎セレモニーには、インドネシア・ユネスコ国内委員会会長 H. Arief Rachman 博士とユネスコスクール・ナショナル・コーディネーターHasnah Gasim ハスナ氏が出席し、Rachman 博士より「今日は、インドネシアと日本の両国の交流が実現し、とても素晴らしい。経験は最善の教師(Experience is the best educator)といわれる。直接交流し、互いに学んでほしい」とあいさつを述べた。

大ホールでの歓迎セレモニーの後、日本、インドネシア双方から各学校の ESD の取り組みを発表した。

伝統舞踊と歌による歓迎

(1) 日本側参加者のプレゼンテーション

- 荒木　千尋（大阪府立北摂つばさ高校）
  東日本大震災被災地でのボランティア活動を通じて、考えたことを発表。
- 萩原　健輔（群馬県立利根実業高等学校）
  センサーカメラを使用した野生動物の行動調査、農業廃材を利用した獣害防除柵の研究など「地域の活性化について」発表。
- 松岡　光龍(岐阜県立池田高等学校)
  地域でさまざまなボランティア活動に参加することを通じて、人との関わり、つながりができたことなどを発表。
- 安田　百花（福島県立安達高等学校）
  復興教育など学校の ESD の取り組みや、自然科学部での太陽光発電の研究、将来、発展途上国で働くという夢について発表。

日本側プレゼンテーション

(2) インドネシア人参加者のプレゼンテーション

インドネシアからは、SMK Negeri27 の高校生ほか、SMA34 Jakarta(ジャカルタ)と Wikrama Vocational High school（ボゴール）の生徒も参加した。各校代表者が学校での ESD の取り組みについて発表をした。

- SMK Negeri27
  校内美化と温暖化防止のため学校敷地内での木々の植栽活動や、有機廃棄物を利用した堆肥作りと堆肥の配布などの取り組みについて。

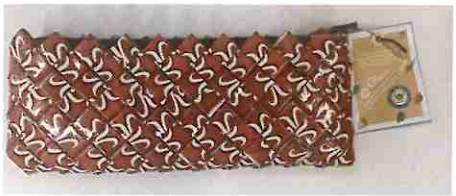
- SMA34 Jakarta
  ３Ｒと紙や商品パックを再利用した手工芸品作りなどについて。

- Wikrama Vocational High school（ボゴール）
  省エネ活動や校内クリーン作戦、３Ｒ のコンセプトに基づいた廃棄物の再利用（ペットボトルを再利用した温室の設置、リサイクルバッグなどの作成など）について発表。

キーホルダー

ショッピングバッグ

スリッパ



ペンケース

Wikrama Bogor Vocational High School の古紙や商品パッケージを再利用して、作成した製品

交流プログラム次第

Batavia Room (SMKN 27 Hall)

Time	Agenda
09.00	The Guests are welcomed by *Marawis* Music at the Gate (Main Entrance) to the building/room and served with welcoming Drink (*Bir Pletok*)
09.05- 09.15	Singing National Anthem and Praying
09.15- 09.25	Traditional Dance Performance (*Bajidor Kahot*) by the students of SMKN 27
09.25- 09.45	**Opening Session** Welcoming remarks given by: 1. Prof. Arief Rachman, Indonesian National Commission for UNESCO 2. Hasnah Gasim, National Coordinator of UNESCO ASPnet 3. Mayumi Itagaki, Leader of the 7th ESD International Exchange Programme (Nagoya city Meito High school) 4. Mitsuru Miyasaka, Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ 5. Principal of SMKN 27 (as well as opening the program)
09.45-11.00	**Sharing Session: Presentation and Discussion (ESD Program)** • 3 representative schools from Indonesia 1. SMK Negeri 27 Jakarta 2. SMA Negeri 34 Jakarta 3. SMK Wikrama Bogor • 4 representative students from Japan
11.00 – 11.15	**Photo Session** **Souvenir Exchange**
11.15 – 12.00	**School Tour** Observation of organic programs and recycled products of SMKN 27
12.00 – 13.00	Lunch and Prayer **Closing**
13.00	Field Visit to Kota Tua (Old Town Jakarta)

(3) 校内見学

グループに分かれ、SMK　Negeri27 の高校生が引率する形で、校内見学をした。野菜づくりや堆肥作りなどの ESD の取り組みを見学した。職業訓練校として、卒業後に役立つ専門知識や技術の習得を目的として行われている、パン作り実習、美容実習、ホテル実習など、それぞれのコースの実習の様子も見学した。

ハーブ栽培

廃品回収(ごみの種類ごとに分別)

堆肥作り。完成後は包装して配布。

不要容器を再利用した野菜栽培

ホテル実習

パン作り実習

(4) コタ地区視察

学校での昼食後は、バスで移動し、日本とインドネシアの高校生が一緒に、世界遺産の暫定リストに登録されているコタ地区を見学。UNESCO 無形遺産にも登録されているワヤンを紹介した「ワヤン博物館」を一緒に見学をした。

(8) タマン・ミニ

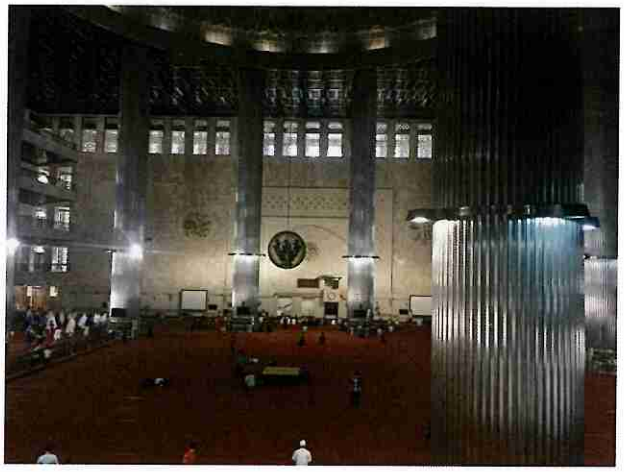
多様な民族が住むインドネシア各地の文化を再現したテーマパーク「タマン・ミニ」を訪問。公園内にはインドネシアを構成する全州の代表的な家屋が並び、内部には衣装や生活用具などが展示され、各民族の生活様式を知ることができた。

(9) ジャカルタ市内視察

1961 年に完成した国家独立記念塔モナスを見学した（外観のみ)。

東南アジア最大の大きさのイスティクラル・モスクは、中に入り、堂内の様子を見学した。モスクの訪問が初めての参加者がほとんどで、イスラム教徒であるガイドさんの説明を聞きながら、イスラム教について触れた。イスラム教徒が多く占めるインドネシアだが、宗教の自由が認められており、イスティクラル・モスクの向かいにあるカテドラルも併せて、見学をした。

カテドラル



イスティクラル・モスク。写真左下は、モスク内にある、祈りの時間を表す掲示板)

(10)在インドネシア日本大使館

中村亮公使（在インドネシア日本国大使館広報文化センター長）を表敬訪問した。公使から、参加高校生がインドネシアに1週間滞在しての感想などを交えて、日本とインドネシアの関係、日本とインドネシアの共通点と相違点をお話いただいた。また、相手国と日本のパイプ役として大使館の業務のご紹介をいただいた。生徒から質問をうける時間もとってくださり、「日本が第二次世界大戦時に約3年間占領していた時期があるにもかかわらず、親日なのはなぜか？」という質問に対し、「日本を恨んでいる人もいるが、日本が真摯にインドネシアとの関係改善を図ろうとしてきた努力がインドネシアでは認められているのではないか」と公使のご回答いただいた。これまでの外交官としてご自身の経験も踏まえ、「海外に出るということは日本を理解することにつながる。相手の共通点を見つけることが大切でそれが両国の関係をよくするきっかけになる。こうした考えを踏まえて、世界とつながってほしい」とエールをいただいた。

(11) 三菱東京 UFJ 銀行ジャカルタ支店

勝田祐輔支店長、袖岡嘉憲副支店長、インドネシア人行員 3 名の方を訪問した。はじめにインドネシア人行員の方より、三菱東京 UFJ 銀行ジャカルタ支店の業務内容について説明をいただいた。1957 年駐在事務所開設され、インドネシアに進出している日本企業の 80%が同行に口座をもつ。インドネシア国内で資産が一番大きい外国の銀行。従業員数は日本人 7 人、インドネシア人行員 700 人。顧客の半分は日系企業、半分はインドネシア企業。

以前は、日本人行員がもっと多く日本から派遣されていたが、現在は、インドネシア人の雇用を確保することに重きをおくインドネシア政府の方針もあって、現地スタッフの数が増えているとのことだった。優秀なインドネシア人スタッフが多く、日本のビジネススタイルを学ぶために、日本国内へ研修の派遣も行っている。ジャカルタ支店でも CSR 活動を熱心に取り組んでおり、年に 3-4 回、地元の学校の校舎を立て替えるための支援をしたり、中古コンピューターを寄贈したり、チュリティマラソンに参加などをしているとのことだった。

(12) UNESCO ジャカルタ事務所

Gunawan Zakki (National Program Officer for Education) さんと杉浦愛さん（Programme Specialist for Science Policy and Capacity Building 科学担当）にお会いした。海外出張のため不在であった事務所長に代わり、Zakki 氏より歓迎の挨拶をいただいた後、グリーンスクールと気候変動教育に関するインドネシアの経験について説明があった。

杉浦さんからは、UNESCO ジャカルタ事務所のアジア太平地域事務所としての役割や、自然科学分野での活動についてご説明をいただいた。杉浦さんからは、「食糧問題、環境、水、エネルギー問題など持続可能な開発を脅かすイシューのすべてが互いリンクしているため、物ごとをつなげて考えることの大切さ」が強調された。

高校生参加者 4 名から各学校の ESD の活動紹介をし、UNESCO ジャカルタ事務所 Zakki さんと杉浦さんからコメントをいただいた。

- 相沢　咲希（宮城県仙台二華高等学校）
  松尾鉱山が北上川などに与えた環境的影響についてのフィールドワークやメコン川でのフィールドワークを通じて、調査から課題をみつけ、その解決策を考え、実際に行動に移すことの大切さを発表した。

- 石原　さよ（晃華学園高等学校）
  減少傾向にあるホタルの保護活動について、地球環境保全と絡めて発表。ホタルの飼育活動を通して自分たちが学んだこと、活動が自分たちに与えた影響などを発表。

- 香川　美咲（広島県立安古市高等学校）
  食材の産地調査や地産地消を意識した弁当作りや、ESD FOOD PROJECT などの取り組みを通しての成果と、食を通した持続可能な社会の実現にむけての課題を発表。

- 山根　颯真（奈良女子大学附属中等教育学校）
  学校の「ゼロ・エミッション」活動で、紙の再生紙としての活用など、不要となったものを再利用した事例を紹介しながら、「再生利用」のコンセプトが持続可能な社会の実現をつながると発表。

5. 参加者の報告書~帰国後の振り返り~

第７回ＥＳＤ国際交流プログラム報告書

宮城県仙台二華高等学校
相沢　咲希

今回プログラムに参加して、ＥＳＤの活動についてシェアできたことはもちろんですが、インドネシアという国を、身をもって感じられたこと、この仲間に会えたことも、私にとってとても貴重で、刺激的な経験でした。

ＪＡＹＡＧＩＲＩセンターやＣＬＣ、現地のユネスコハイスクールを訪問し、働く方や高校生と交流することで、インドネシアの方々の気さくさや優しさを感じました。実際に行く前は、「スリに注意する」「衛生状態が良くない」「イスラム教徒が多い」などの情報だけを受け取り、知らぬ間に警戒するような思いを持っていました。しかし、お菓子でもてなしてくれたり、活動や文化について丁寧に説明してくれたりと、明るくて優しい人たちでした。また、ユネスコハイスクールでは、音楽の歓迎から始まり、校舎内も丁寧に案内してくれました。今回の交流は、自分の生活の半端さや、目標の曖昧さに気づいたことに加え、単純にとても楽しかったです。

日本、インドネシア両方の生徒のプレゼンを聞いて、様々なＥＳＤの理念に基づく活動が行われていることが分かりました。私の学校では、知って、考えるということが中心になっているので、今回のプログラムの経験を自分の学校に持ち込み、実践的な活動を行って行きたいと思いました。

また、三菱東京ＵＦＪ銀行ジャカルタ支店を訪問した際に、日本人の副支店長さんがおっしゃっていたことが印象に残っています。インドネシアに入国して、仕事中のはずなのにおしゃべりをしていたり、休んでいる人がいたりすることに違和感を持ちました。そんなとき、副支店長さんが、「日本と違う点を、いちいち日本の感覚に合わせようとするのは、疲れるだけ。インドネシアで働く、日本人の上司としてするべきことは、この国の国民性に合わせて会社を回していくこと」というようなことをおっしゃっていました。ただ日本の感覚から、態度が良くないと思っていた私にとって、それは大事な考えであると、とても納得する言葉でした。

今回のプログラムに参加したメンバーは、本当に良い影響を与えてくれ、楽しい仲間でした。わたしは、滅多にない機会であるし、このプログラムを全力で楽しもうと思っていました。しかし、参加メンバーたちはさらに全力で取り組んでいることを感じました。また、同じような目標を持つ全国の高校生と友達になれたことで、自分自身を見つめ直し、変えるきっかけになりました。今回のプログラムで知ったこと、感じたことを忘れずに、これからの生活やESDの活動に反映させていきたいです。

最後に、このプログラムを支えてくださった方々に、感謝します。

第７回　ESD 国際交流プログラム　参加報告書

大阪府立北摂つばさ高校
荒木　千尋

私は自分の視野を広げたい、自分の知らない世界をのぞいてみたいと思い今回の ESD 国際交流プログラムに応募させていただき参加させていただきました。このプログラムで私はかけがえのない仲間と出会い、かけがえのない繋がりを手にすることができました。

私の中の知識でインドネシアについての情報はあまりなく不安がたたありました。しかし、実際に現地に足を踏み入れたことで日本との文化の違い、食の違い、気温の違い、マナーの違い、交通機関の違いなどたくさんの違いを見つけました。

文化では、サウン・アンクルン・ウジョという日本での能楽や人間浄瑠璃などと同じ無形文化遺産であり小さな子供から大人まで協力しあい文化への大切さ尊敬さを感じました。一緒に参加させていただく機会もあり、他国の文化に触れることの楽しさやわくわく感で胸がいっぱいになりとてもいい体験でした。

私のプレゼンテーション発表は、インドネシアのユネスコスクールの生徒の皆さんの前での発表でした。私たち北摂つばさ高校の活動の一つである震災当時から行っている“東日本大震災復興支援”を世界の人にも知ってもらいたくべくプレゼンテーションを行いさせていただきました。インドネシアの高校生のプレゼンテーションを聞く機会もあり他国の活動を知るとても勉強になる時間でした。プレゼンテーションが終わるとたくさんのインドネシアの生徒たちが話しかけていただき仲良くなることができました。
お互いの国のこと、学校のこと、生活のことなどたくさんの話をして他国との交流は必要なものだときづかされました。

インドネシアの市内視察などこのプログラムに協力してくださっている三菱東京 UFJ 銀行のジャカルタ支店への訪問、日本大使館への訪問で、海外で仕事をする日本の方々にも直接お話ができ自分のこれからの将来にも影響をあたえられました。英語の必要さ、コミュニケーションの大切さ、自分たちで自分たちの国の将来を考えることの必要さなど普通の高校生では感じることのできないことばかりを学ぶことができました。日本大使館に訪問させていただいたさい、とても胸に残る素晴らしいお言葉をもらいました。“入り口ではなく出口“　どんな形で入り口に入ったとしてもそこで結果を出せば入り口など関係ない、結果が残った出口が大事だと。私はこれから一生この言葉を胸にこれからのことを考えていこうと思いました。

このプログラムに参加でき、インドネシアへ訪れることができたことを誇りに思います。そして、このプログラムにたずさわっていただいたすべての方々に感謝します。最後に一緒にこのプリグラムに参加し出会えた 11 人の高校生とインドネシアの高校生に心から“ありがとう”とお伝えします。皆に出会えたことは“奇跡”であり“運命”だったと思います。本当にありがとうございました。

第7回ESD国際交流プログラム報告書

晃華学園高等学校
石原　さよ

初めての顔合わせとなった事前研修会から最後の日までの一週間は本当にあっという間に過ぎ、帰国してからしばらく経った今でもインドネシアでの日々がまるで昨日のことかのように鮮明に覚えています。インドネシアという今まで訪れたことのない国に対する多くの疑問とそこで得られる経験に期待を寄せながら臨んだプログラムでした。

アンクロン・ウジョを訪問しインドネシアの伝統芸能を実際に鑑賞した折には、単にその楽器が奏でる音色や踊りの美しさに感動しただけではなく、現地の方々、特に若い世代の、自分たちの伝統芸能に対する姿勢に感銘を受けました。自国の文化や伝統芸能に幼いうちから親しみ、実際にその訓練を幼い頃から積み重ねることによって、インドネシアでは子供であっても自国の文化に対する意識が高く、誇りを持っている様子がとてもよく感じ取れました。それに対して伝統芸能の継承者不足による伝統芸能の存続の危機が叫ばれている日本では、若い世代には自国の文化や伝統を知る機会も多くはなく、それ故興味・関心が薄いまま大人になってしまっている現実を改めて実感させられたひと時でもありました。

インドネシアのユネスコスクールの訪問、現地の高校生との交流を通しては、持続可能な環境・社会の実現に向けて各々の国の将来を担う次世代の私たちがどのようなアクションをとっていかなければならないのかについて意見交換をしただけでなく、既に行っている活動についてお互いに紹介をし合いました。

このプログラムに応募する際、私は持続可能な社会とは“誰もが見捨てられていない社会”のことであると思うと書きましたが、バスで移動中に目にした路上生活をしているように見受けられる子供たちの存在には胸が痛みました。あの子供たちがきちんと“参加している”と感じられる社会をつくっていくことは、恵まれた国に生まれた日本の私たち、同じ世代の私たちが考えていくべき大切な課題です。日本に帰国したあと学校で行われる報告会では、このことも必ず皆に伝えようと思います。

事前研修でレクチャーをして下さった日本ユネスコ協会連盟の鈴木佑司先生は300を超える多様な種族を抱えるインドネシアを“Unity in Diversity”と表していらっしゃいました。その時はこの言葉をあまり深く考えることはありませんでしたが、実際にインドネシアに行ってみてこの言葉の意味を肌で感じました。インドネシアで最大級のモスクのすぐお向かいにはカトリック教会が建っていたり、高層ビルの狭間にはshanty townが広がっていたりと日本では見ることの無い光景を目の当たりにし、私は多様なバックグラウンドを持ちながらも皆が共存しているインドネシアの社会に非常に魅力を感じました。

今回のインドネシアでの経験は私の小さな世界を押し広げてくれました。ここで感じた様々なことは、私の中でまだ明確な形にはなりませんが、それらを携えながら私も自分のできることを少しずつ考えていきたいと思います。

この貴重な体験を味わうチャンスを私に下さった日本ユネスコ協会連盟の皆様、引率して下さった板垣先生、そして三菱東京UFJ銀行の皆様に心より感謝申し上げます。

ESD 国際交流プログラム報告書

広島県立安古市高等学校
香川　美咲

私はこのプラグラムの応募要項を見たときに、「やるしかない!」って率直に思いました。国際交流にはもともと興味があったのですが、国内での活動ばかりだったので、実際に海外に行ったのはこのプログラムが初めてでした。初めての海外ということで、すごくわくわくしながらも緊張で押しつぶされそうでした。でもそんな事とは裏腹に、ほかのメンバーともすぐ馴染めたし、何よりプログラム自体の雰囲気がとてもよく過ごしやすかったです。

インドネシアに着いて初めに感じたことは、まず自動車と人が多いこと。2 車線のはずなのに３台並走していたりバイク１台に４人乗っていたり、とにかく人と自動車が多い印象でした。そして私が１番インドネシアで苦労したことは、食事です。見た目は日本とあまり変わらないものでも、味が辛すぎたり甘すぎたりと極端で、さらには量も多くて大変でした。ですが、現地に行ったからこそできる体験だと思い、今ではいい思い出です。

また心に強く感じたことが 2 つあります。1 つ目は、環境に対する意識が高いことです。学校で、井戸を掘ったり、コンポストで肥料を作ってそれを活用して野菜や薬草を作ったりしていて小さい範囲ではあるけど、確かにそこには持続可能な生活が広がっていました。また、みんな自分の目指す目標を持っていて１人１人輝いて見えました。

2 つ目は、様々な文化を持つ人たちがうまく共存しているということです。インドネシアには約 300 の民族がありますが、日常的に他の文化の人たちとも生活を送っていて驚きました。また文化の違いから多様の舞踊や音楽が存在し、日本では見られない楽器やリズム、踊りばかりで鑑賞していてとても面白かったし、逆に日本にしかない伝統舞踊の良さを感じることができました。

最後に、私はこのプロジェクトで感謝の気持ちと挑戦する大切さを改めて学びました。今回このプロジェクトに参加できたのも親や友人、先生の理解があったからこそだし、プログラム中は、古澤さん、真由美先生、宮坂さんがいてくれたからこそ私たちはこのような貴重な経験ができたと思っています。ありがとうございました。また、広大に ESD 部があるとうかがったので、すごい興味が湧いたし、これからも ESD と関わっていきたいと思いました。そして、１２人の仲間と出会えて本当に良かったです。この関係は一生もんだと思っています。お互いこれから別の道を歩んでいくけど、またどこかで出会える、そんな気がします。貴重な体験、たくさんの人との出会い、交流をありがとうございました。この経験をこれからの人生に生かしていきたいと思います。

第７回 ESD 国際交流国際交流プログラム研修報告書

広島県立呉三津田高等学校
神田　実鈴

インドネシアを訪問することが決まった時、私は漠然と，経済格差や貧困などの問題があるのではないかと考えていました。しかし、実際に訪問してみると全く違いました。「近代化」という意味では先進国に比べて遅れていることは事実です。しかし、ESD という観点から見ると、日本よりかなり進んでいました。今回のプログラムは私のイメージを覆す驚きと発見の連続でした。

一番驚いたのは、現地のユネスコスクールで出会った高校生の姿です。彼らは私たちとは違う「目の輝き」を持っていました。私たちとは比べ物にならないほど、生き生きしていたのです。今回訪問したユネスコスクールは，専門学校のような形で、学科それぞれが主体的に ESD 活動に取り組んでいました。また，それぞれの学科が独立して活動を行うのではなく、他の学科と共同して活動していました。例えば、食物学科の生徒が生産した作物を、調理学科の生徒たちが学内の調理場で調理し、その料理を接客学科の生徒が学食で提供するというように、それぞれの活動がつながりあっていて、学校の中だけで ESD が成り立っていたのです。私はそこに、日本との大きな差を感じました。

そもそも ESD とは、持続可能な社会を作るための取り組みです。しかし日本は、それを「近代化」によって引き起こされた問題を解決する手段としてしか捉えていないのではないでしょうか。言い換えれば、「近代化」で何かが失われることを当然のこととして受け入れているのではないかということです。このまま失われたものの穴を埋めることだけに気を取られ続けていると、日本は，持続可能な社会を作るどころか、現状維持さえも難しくなってしまうのではないでしょうか。

私はこれまでずっと、「持続可能な世界とは一体どんなものか、また，その実現に向けて高校生の私に何ができるのか。」ということを考えてきましたが、はっきりした答えを見つけられずにいました。しかし、今回の研修を通し，高校生の姿から、そのヒントを 見つけることができたと思います。

今、未来を担う私たちに求められているのは、失われつつある「日本文化の継承と保存」であると再認識させられました。また，自ら課題を発見し解決策を練る、という主体性を重視した ESD 活動に取り組んでいくことが高校生の私たちにできる唯一のアクションであると考えます。参加した者の義務として、この研修中に学んだことを、一人でも多くの人に発信し、共有していきたいです。

第７回ＥＳＤ国際交流プログラム報告書

岡山県立矢掛高等学校
田口　靖浩

窓から描かれた群青色の空、下に浮かぶ白い雲、いったいどこまでこの果てしない青空は続いてゆくのだろう。８時間のフライトを終え、その先に見えた大きな島国を見た時は何とも言えない感動が自然と私を包み込んだ。

「世界は広い」このプログラムを終えて、率直にそう思った。初めての海外ということもあるが、国境を越えることはなんてすばらしいことなのだろうと身に染みた。私の人生で最も濃密な１週間になった。それと同時に今までの私の人生を少しばかり後悔をした。知らない世界に足を踏み入れるまでは不安と興奮の繰り返しであったが、踏み入れた時私の人生が大きく広がった。

私は今までプレゼンテーションなんてしたことがない。ましてや、英語なんて思いの外だった。恩師と練習を重ねて自信がついたと思った矢先、強力なライバル達が現れた。日本の全国の選抜された１１人だ。彼らは個性豊かでコミュニケーション能力が高くすぐに打ち解けることが出来た。初めて１１人のプレゼンを聞いた時は圧倒された。同じ高校生でこんなにも違うのか、自分にないものは何だろうか、繰り返し自問自答した。

私はバンドンの GEGER　SUNTEN CLC という施設へ訪問する。ここで、私を含む先鋭４名がプレゼンをする。準備はしっかりしてプレゼンに望んだが、終えてみると反省点や改善点が浮き彫りになる。私は備中神楽という踊りを広めるために旅立った。現地の方に備中神楽の舞いを見てもらい、日本の伝統芸能に触れてもらった。歓声やや拍手が巻き起こり、あの時の高揚感は今でも覚えている。自分自身現地の踊りを共有したり相違点を理解し合いながら楽しんだ。英語はあまり話せなかったが、伝統的な舞踊も英語のようにコミュニケーションツールになることを学んだ。このツールを通してもっと多くの人に知ってもらいたい。また、継承者不足を解決する手がかりも得た。

今回、最も白熱したプレゼンテーションは現地のユネスコスクールでのものだった。自分のプレゼンが終わり、安心している中、目の前で心が惹き付けられるようなプレゼンが行われた。現地の高校生の表現力、英語力、プレゼン力全てが完璧だった。すばらしかった。また、私たちと現地の高校生達は国は違えどＥＳＤについての志向や本質は同じだと感じた。その時、ＥＳＤや世界についてもっと知りたくなった。

今回、私は様々な貴重な経験をさせていただいた。私の一生忘れえぬ思い出となった。このプログラムで私の将来が広がり、明確になった。この経験を自分一人で終わらせるのではなく、学校・地域・社会に結びつけ貢献すること。それがこのプログラムに参加した者の使命である。また、このプログラムに関わって下さった全ての方に感謝している。本当にありがとうございました。

今回出会った仲間にも深くお礼を言いたい。みんなと笑いながら夢を語り、ふざけあったあの時間は本当に楽しかった。これから私は自分で決めた道を突き進もうと思う。そして、また必ず笑顔で再会しよう。約束のその時まで。

第７回ＥＳＤ国際交流プログラム報告書

群馬県立利根実業高校
萩原　健輔

今回このプログラムに参加して、私自身が今まで持っていた価値観や考えていたことががらっと 360 度変わりました。

今回訪れたのは、バンドンとジャカルタでした。実際にインドネシアに行くまでは、発展途上国と聞いていたので道路は舗装されておらず、工場の排気ガスなどが立ち込めているなどといった偏見を持ち、勝手な想像をしていました。しかし、実際に行ってみれば日本と変わらない街並み、しっかりと舗装されている道路、多くの木々に囲まれている景色など自分の目で見なければ分からなかったことばかりでした。インドネシアの人は皆、自国が発展途上国だということを理解して環境問題に取り組んでいました。

六日目に訪れた SMK Negeri27 では、実業的な活動をしており、落ち葉を集めて腐葉土にしたり、ペットボトルを再利用して野菜を育てたりしていました。その他にもいらなくなった広告などを使ってエコバックを作ったり、森林を守ろうなどといったポスターの作成もしていました。私は、この活動にとても感銘を受けました。都市部であるジャカルタの高校生たちが率先して環境保全活動を行っていたからです。私はここで自分の考えを改めました。今までは、自分にはあまり関係ないと思っていた環境のこともインドネシアの高校生と触れて、自分には、何ができるのだろうか、今の環境についてもっと知らなくてはいけない、と思うようになりました。

私が環境について考えることになったのも、この海外研修でインドネシアに行けたおかげだと思っています。

この他にも、インドネシアの高校生は皆英語をしっかりと話していました。単語や簡単文程度の英語なら多少は話せましたが、たくさんのことを言われると返答ができなくなり会話自体がとても大変だったと感じました。これからの私の課題は、英語力を身に着けることです。これからは、社会全体がグローバルなものとなってきます。なので、英語は話せるようになるのが、今後の課題だと思っています。

私は、このプログラムのリーダーをしましたが、英語もうまく話せず、上手くまとめることも出来ず、食事の時に気の利いたことが言えないことがほとんどでしたが、皆のおかげで最後まで務めることができました。プログラムは終わりましたが、私とみんなとの関係は、一生のものだと思っています。これから何年たっても自分はこのプログラムでみんなと一緒に学んだこと、体験したこと、見てきたものすべて忘れないです。

最後に、しつこいようですがこのプログラムを支えて下さった皆さん、一緒に行けたみんな私の生涯に残る最高の一週間をありがとうございました。

第7回ESD国際交流プログラム報告書

愛媛県立新居浜南高等学校
古川 若奈

私は、今回のプログラムに参加して、自分の目で見ることの大切さを痛感しました。初めての海外に、内心たじろいでいる部分もあり出発前は不安と期待がせめぎあっていました。しかし、いざ飛行機を降りてみると、初めて感じる異国の雰囲気にすべて飲み込まれ、これから始まることへの期待で胸がいっぱいになったのを覚えています。

訪問したCLCやユネスコスクールの生徒たちは、自分のしたいこと、叶えたい目標が明確になっていて、受け身でいるのではなく、主体的に学ぶことの楽しさを知っているように感じました。このように物事に取り組む姿勢は、私たちも見習わなければならないと思いました。プレゼンテーションや交流の際には、自分の勉強不足をとても感じました。理解はできても、自分の思ったことが伝えられず、もどかしい気持ちでした。しかし、拙い言葉でも汲み取ってくれたり、表情やジェスチャーで気持ちを伝えたりして、少しでもコミュニケーションがとれたのは嬉しかったです。また、インドネシアで出会ったみなさんは、温厚で親切な方ばかりでした。初対面ではないような距離感で居ることができ、とても居心地がよかったです。

プログラムを通して、インドネシアには、数えきれないほど沢山の文化があることも知ることができました。民族衣装や生活様式、道具や楽器、言語まで日本では考えられないほど豊かなものでした。

また、モスクを訪れ、礼拝の様子も拝見しました。日本人の感性だと宗教的なものにはイメージが湧きにくく、畏怖の念を抱くようなものでした。しかし、そこでは礼拝というものがごく自然に生活の中に溶け込んでいて、すんなりと受け入れることができ、何も怖くないのだと安心しました。

インドネシアを訪れ、自分の目で本物の姿を見て感じることで、偏った情報ではなく、自分なりの知識を得ることができました。数えきれないほどの建設途中のビルや道路を見て、インドネシアは、現在進行形で急速に発展しているのがすぐに分かりました。数年後の姿がとても楽しみになり、また訪れてみたいと思いました。

そして、それぞれの活動は違っていても、同世代のみなさんと接する中で、今後の自分のESDへの取り組みや、学習へのモチベーションも向上しました。夢のような一週間でした。あっという間に過ぎて、それでも確かに充実しすぎるくらいの体験をすることができました。ここで出会えたすべてのみなさんに、心から感謝します。

第７回 ESD 国際交流プログラム　参加報告書

岐阜県立池田高等学校
松岡　光龍

今回の第７回 ESD 国際交流プログラムでは、初めてのことばかりでした。私は海外に行くことはもちろん、全国各地の高校生との交流も今回が初めてだったので、とても緊張しました。それでも、一週間という短い期間ではありましたが多くのことを学ぶことができ、自分の視野を広げることができました。

インドネシアでは驚くことが多かったです。発展途上国と聞いていたので、日本より技術発展していないと思っていました。しかし、実際に現地に行くと予想どおりのところもあれば、日本以上に発展しているにではと思うほど進んでいるところもあり、驚きました。

訪問した JAYAGIRI センターは、「子供たちと社会をつなぐ」ための施設で 1961 年に建てられました。この施設は保育園のような場所や子供の保護者の相談、クレームを受け付ける場所でした。また、SMK Negeri 27 では、日本の学校では行われないような、肥料作りや販売をはじめ、物作り、植物の栽培など社会に出たときに役立つことを学んでいました。このことから、インドネシアは子供たちの教育に力を入れている国であることを感じました。一方で、この国にはいくつもの文化があり、地域によって全く異なっていました。日本のアニメの着ぐるみも見られ、他国の文化も取り入れていることを知りました。

インドネシアで一番印象に残っていることは日本大使館を訪問したことです。なぜなら、日常では接することのできない大使館の方のお話を直接聞くことができたからです。外国にも関わらず大使館の敷地に入るとそこは日本の国になっていたことに衝撃をうけました。大使館は国同士の協力関係をよりよくするためにあることを今回のお話を聞いて理解しました。日本の技術の提供や資金援助、他国への協力要請など、インドネシアからの要求を日本に伝えたり会議の日時を決めるなど非常に多くの仕事を日々されているというお話から国同士のつながりを保つことはこんなにも大変であり、国からの信頼されている方にしか任せることのできない仕事だと改めて実感できました。

今回のインドネシア研修は行って終わりではなく、この経験を今後の生活に生かし、周りの人に伝えてこそプログラムの本当の意味で完了できると考えています。今回一緒に行った全国の仲間とプログラムを支えてくださった皆様には大変感謝しています。本当にありがとうございました。

第７回 ESD 国際交流プログラム報告書

福島県立安達高等学校
安田　百花

私には青年海外協力隊になるという夢があります。しかし、私は今まで途上国に行ったことがありませんでした。ですが、JICA で途上国支援を行っていた方やガーナに行った先生の話など、途上国についての話を聞いているうちに、話を聞くだけでは物足りなく、実際に自分の目で途上国を見たい、途上国の課題について自分なりに考えたいと思い、ESD 国際交流プログラムに参加しました。私は、部活動でポイ捨てされても土に還る、生分解性容器の性能向上について研究をしています。そこで、途上国にはどのくらいゴミが落ちているのか、どうして人々はゴミをポイ捨てするのかなど、環境面や人々の暮らしに着目してインドネシアを見るという目標を立て、日本を出発しました。

実際に現地に行ってみると、木の根元にゴミが散乱していて、先生が言っていた通りだと思いました。しかも、落ち葉やシミのように見えるが実際はティッシュのカスだったというように細かいゴミも大量にあり、その量は想像を超えていました。たくさんのゴミを見つけるにつれ、生分解性の容器よりもまずはポイ捨てをしてはいけないと教えるために、全ての人が教育を受けられるような制度を整えるべきだと考えました。しかし、通訳さんから「教育を受けていてもポイ捨てをする人もたくさんいる」と聞き、インドネシアの文化が成熟するまでの間に、大量の飲料水容器などのゴミがポイ捨てされてしまうのは避けられない、と考えるようになりました。こういった経緯から、例え効果が小さいかもしれなくとも生分解性の機能は必要で、このような容器を開発し、継続的に使ってもらうことで世界のゴミ問題を少しでも改善することに繋がるかもしれない、と自分の研究の必要性を再認識し、研究へのモチベーションが向上しました。

また、研究のこととは別視点で印象に残ったことは、CLC を視察した際、NGO ボランティアに参加している日本人の大学生に会ったことです。集団の輪から離れ、個人的にお話を伺ったところ、NGO ボランティアが終わったら青年海外協力隊に参加すると話していて、同じ目標を持っているからなのか、驚くほど大学生が話すことに共感できました。活動中にどんな風に課題を解決しているのかと質問をしたところ、「現地の人は問題があってもそれを問題だと思っていない。だから、それはいけないんだよと教えることから始めている」と教えてもらい、私の「どうして人々はゴミをポイ捨てするのかを知る」という目標が達成されました。この話も大学生が実際にボランティアを行ったから言えることで、すごい！かっこいい！私もこんなことを言えるような活動をしたい！と思い、絶対に青年海外協力隊になる！と夢に対する意識も高まりました。

ESD 国際交流プログラムを通して、出会った方から多くの刺激を受けました。プログラムにただ参加するのではなく、自分から進んで話しかけ、多くの質問をすることが出来たからより充実したものになったと思います。集団の輪の中にとどまらず、出る、行く、話かける、これが大切だと感じました。将来の夢を叶えるために、「常に一歩前へ」をこれからの自分の合い言葉にして、積極的に新しいことに挑戦していきたいです。

第7回ESD国際交流プログラム報告書

奈良女子大学附属中等教育学校
山根　颯真

2年前、初めて海外旅行に行ってから、「海外」に強いあこがれを持つようになった。また、ありきたりではあるが、“日本を出ることで、広い価値観を持てる人間になりたい”というのが自分の目標であった。このプログラムの募集要項を見たとき、“インドネシア”という言葉に目が留まった。途上国と言われている国に行くことができるチャンスなんてめったにないと思い、すぐさま書類作成に取り組んだ。しかし、合格通知と関係書類が届いたとき、喜びとともに、少し残念さも感じた。それは、前回まではドイツに行っていた、という事実。インドネシアに行けるのも十分すぎるくらいにうれしかったが、やはり先進国に行きたいという思いが残っていた。

しかし、実際訪れてみると、自分の途上国に対する勝手な偏見とは相反する世界が広がっていた。もちろん、東京や、大阪といった地域までとは言わないが、道路は舗装されていて、高層ビルが並び、大型スーパーマーケットがある。一方、田舎のほうでも、僕が想像していた途上国とは異なる光景だった。もちろん、日本より不便な点もいくつか挙げることができる。“郷に入れば郷に従え”という意味で、普段体験することができないものに出会い触れ合えたことで、自分にとって新たな‘世界’に出会うことができた。

とにかく様々な経験をした一週間の中、SMK　Negeri 27（ユネスコスクール）でのふれあい・体験が、もっとも私を刺激した。まず、同じ高校生とは思えないほど生徒一人一人が自分の夢を持ち、それに向かって勉強している点。実業高校というだけあって、観光専攻やホテル専攻など様々な人がいたが、どの人も私はこういう所で追う言う仕事がしたい、という強い意志があることに驚いた（観光専攻の子で、日本のツアーをするんだ！と言ってくれる子がいて少しうれしかった）。さらに、全員の英語力の高さにも驚かされた。また、学校の枯葉や土を耕して肥料を作ったり、回収したペットボトルで野菜を育てたりと、まだまだ自分の学校ではしていないけれども実現できそうな活動を見つけることもできた。このほかにも、インドネシアの方々の温かさ、文化、学校の仕組みなど、この学校で経験することができた。

「このプログラムが私の人生を変えた。」壮行会の時、プログラムの卒業生が話されていたこの言葉をよく覚えている。初めは大げさだと思っていたが、もしかすると今、自分も同じ立場に立っているのかもしれない、と感じる。一週間という短い期間で、本当に多くのことにふれあい、協力し合い、そして経験した。このプログラムが、自分の将来をどう左右するのかはわからない。しかし、今、自分に分かれ道を差し出したのは確かだ。将来、高校を出たらどういう大学の何学部に入り、そしてどんな仕事に就くのか、今まで考えたことがなかった。（考えても、思いついたためしがなかった）。しかし、インドネシアに行き、世界を回ることができるしごとにつきたい、と強く思うようになった。‘世界’と一単語でいえても、日本とアメリカでは何もかもが大きく違うし、アメリカとインドネシアでは大きく違う。初めて途上国に行き、そういった世界を回る、ということにさらに強い思いを抱き、そういう

職業に就きたい、と強く思ったのだ。

本当に多くの人の支えで、全国から集まった私たち 12 人は、貴重な時間を過ごし、無事プログラムを終え、帰ってくることができた。支えてきださった方々、そして奇跡的に会うことができた日本の友達、そしてインドネシアにいる友達にも感謝したい。

ありがとうございました。

第７回 ＥＳＤ国際交流プログラム報告書

福岡県立ひびき高等学校
渡邊 七海

このプログラムへの参加を通して、様々なことを学んだり経験したり出来ました。私は海外に行くことも他校の生徒と１週間一緒にいることも初めてでした。自分が学生の中では最年長とはいえ、過去の経験から年齢の近い人々と関わることが出来るか不安でした。また、緊張や不安などが原因でご迷惑をおかけしてしまい、誠に申し訳ございませんでした。自身の学校がユネスコスクールに加盟しているのは知っていましたが、このような取り組みがあるのは ESD 課の先生から聞いて知りました。そして、このプログラム参加決定の話を受けて、上の不安や英語が不得意という点もありましたが、私に出来ることを一生懸命にしていこうと強く思いました。資料制作をしていくと同時に、インドネシアのことを調べたり滞在経験のある人と話をしたりして事前学習を進めていきました。やはり、インドネシアに行ってみて初めてのことがたくさんありました。交通面や人々の生活体系などを実際に見ることは前知識以上の発見がありました。まさしく、百聞は一見にしかずという言葉通りだと考えます。また、普通の旅行では入ることさえ出来ないような場所まで入って話を伺うことが出来たこと。アンクロン・ウジョで現地の伝統的な楽器･音楽･舞踊に触れることが出来て楽しかったです。また、そこでは福岡県出身の人に会いお話しすることも出来ました。発表はレンバンにある GEGER SUNTEN CLC でしました。内容は単位制定時制という珍しい制度の我が校の紹介と高校の行っている ESD 活動、私が住む市の環境歴史についてです。今まで発表は先生や高校生に対してしたことしかなかったので、小中学生ぐらいの子供達に発表をするのは今回が初めてでした。詰まり気味やどこか事務的な発表になってしまい、子供達には退屈させてしまったと思います。発表後の文化交流では、大人も子供も関係なく盛り上がっており、楽しむという面において国という単位は関係ないと実感しました。多様な文化や人々がいる国とは聞いていましたが、タマン・ミニに行って様々な展示物を見たことで少しでも実感することが出来ました。それぞれの地に息づく多様なものの共存は可能であってほしいと、昔からニュースを見聞きして思っていた自分にとって良い場所に来ることができました。このプログラムで見聞きし感じたことが、今後の自分にどのように結びつくのか明確にはまだ分からないところもあります。しかし、社会に出たとき、いや、出る前であってもきっとこの経験が生きてくるのではないかと考えています。普段の生活からは想像できなかった外国に行くことが出来て、本当によい経験になりました。また、受験勉強をしていくうえで自分が解決しなくてはいけないことを知ることが出来ました。参加することが出来て嬉しい限りです。最後になりましたが、今回のプログラムで出会えた皆様方、本当にありがとうございました。

第 7 回 ESD 国際交流プログラム：インドネシア研修に参加して

第 7 回 ESD 国際交流プログラム　団長
名古屋市立名東高等学校
板垣　真由美

このたび、ESD 国際交流プログラムとして初めてインドネシアで行われる研修に団長として参加させていただく機会をいただきました。応募 100 数名の中から選ばれた 12 名の優秀な生徒たちがユネスコスクールとして各自取り組んでいる活動を英語で発表するということ、インドネシアのユネスコスクール SMKN27 での高校生との交流、また ESD 大賞受賞団体のバンドン JAYAGIRI センター訪問と CLC での発表、日本大使館、UNESCO ジャカルタオフィス、そして出資いただいている三菱東京 UFJ 銀行（MUFG）ジャカルタ支店訪問など、日本ユネスコ協会連盟主催のプログラムだからこそ実現することができる大変充実した内容の日程でした。

12 名の生徒たちも一緒に過ごすにつれてとても打ち解け、最後は自分たちの進路や将来のこと、また日本を再発見し世界のことについても語り合い、お互いに学び合う仲になっていました。インドネシアでは、発表のテーマと内容によって４名ずつ３つの訪問先で発表しました。夜の練習では全員が真剣に英語の発音やデリバリー練習に取り組み、本番では自信を持って自分たちの活動内容とメッセージを伝えることができたと思います。バンドンの CLC コミュニティセンターでは村でのアットホームな雰囲気の中で発表し、その後空手や折り紙、備中神楽など日本文化も紹介して充実した交流をすることができました。ジャカルタ SMKN27 ではインドネシアの生徒たちの発表の後、代表４名からの発表と質疑応答、その後、校内をグループに分かれて案内してもらいました。実際に環境や ESD を意識して学校が取り組んでいる様々な実践例を学び、私も先生方からインドネシアの学校教育システムや英語教育についてのお話も聞くことができ、大変勉強になりました。最終日の UNESCO ジャカルタオフィスでは、各生徒の発表について丁寧に質問やコメントをいただき、オフィスの方からもインドネシアの取組について発表していただきました。若者がＥＳＤについて考えていることを発表し、意見交流することの大切さ、私たちが国は違っても地球という一つの共通の場に生きていること、これを大切に守っていくために話し合い、私たちができることについてアイディアを出し合い、行動を起こしていくことの大切さを改めて実感しました。ジャカルタオフィスの方、日本大使館、MUFG ジャカルタ支店の方々、またガイド、通訳として同行していただいたインドネシアの方々。1 週間という短い時間でしたが、一生の思い出に残るような出会いや発見がありました。インドネシアのユネスコスクールの取組やＥＳＤ大賞受賞団体の努力を目の当たりにしたことはもちろん、世界で活躍されている日本の方々との出会い、語られる言葉は素晴らしいものがあり、日本とインドネシアの関係についての理解も深まり、生徒たちの心に深く刻まれたと思います。

若い世代が実際に海外に行き、自分たちの目で見て経験し、日本と世界について学ぶこと

はとても大切なことです。また、このプログラムに参加したことで、国内外のユネスコスクールの取組や各地域での課題について知り、自分たちの今後の活動に向けて刺激を受けることができました。今回の訪問で印象に残ったのは、この国際交流プログラムでインドネシアを訪問している私たちは「日本の外交」のためにもなっているという日本大使館訪問の際にいただいた言葉、またバンドンの JAYAGIRI センターで出会った先生の「ESD とは、まず人々のマインドセットを変えていくことが大切である」という言葉でした。この２つは ESD 国際交流プログラムを象徴するものとして特に印象に残っています。この研修に参加した私たちが、学んだことを発信して周りの人に伝え、持続可能な社会に向けてできることを行動に移していくことが、今回学んだことを還元する第一歩だと思います。ぜひこの充実した ESD 国際交流プログラムをこれからも継続していっていただけたらと願っております。また私にとっても大変貴重な研修の機会をいただいたことを感謝いたします。

最後になりましたが、今回の ESD 国際交流プログラムを素晴らしいものにしてくださった日本ユネスコ協会連盟の古澤様、お忙しい中一緒にお越しいただいた MUFG の宮坂様、日本ユネスコ協会連盟様、インドネシアでお世話になった皆様、本当にありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

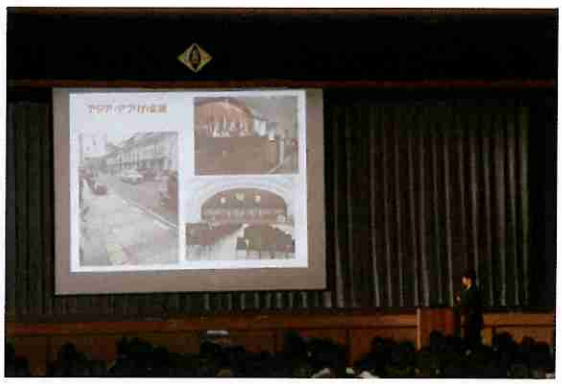
４．事後活動報告　　※2017年10月実施分までを掲載しています。

岡山県立矢掛高等学校
田口　靖浩

《報告会実施内容》
5月1日の7時間目のLHRの時間を使い、20分ほど研修の報告会を発表しました。私がこの研修に応募した理由、ESDとは何か、インドネシアで学んだことを中心に話しました。また、私が応募した理由である備中神楽を全校生徒に知ってもらい、伝統芸能の重要性や魅力を絡めながら話しました。

《１、２年から寄せられた感想》
・国際交流を通じて、これからの世界をより良い物にしていくかを考えることはとても重要だと思う。
・言葉や生活、文化などの違う国が集まったこの地球のことをもっと知りたいと思った。
・日本と近い国や関係の深い国のことをもっと分かり合うといいと思った。

《報告会を終えての感想》
生徒会などの活動もあり、全校生徒の前で話すことには慣れていたが、今回の報告会は現地で発表した英語のプレゼンテーションや自分が学んだことを伝えることは非常に難しく、緊張した。しかし、生徒が私の方を見て聴いてくれて途中からリラックスして発表することができました。また、生徒の感想でＥＳＤや伝統芸能に興味を持ってくれた生徒がいたことが非常に嬉しく、報告会をしてよかったと思います。これから私は伝統芸能の素晴らしさを広めていくとともに、様々なＥＳＤ活動に携わっていこうと思います。これが終わりではなく、私のＥＳＤはこれから始めていきます。



広島県立安古市高等学校
香川美咲

《報告会実施内容》

5月10日にクラス内、7月21日の終業式の2回にわたって報告会をしました。インドネシアの文化、ジャヤギリセンターでのお話、現地高校生とのふれあいで感じたことを中心に、プログラムを通して私が思ったこと、私たちに足りていないことについて話しました。また、UNESCO本部でのお話を交えながら9月に学校内で開催されるESDについてのディスカッションに向けた話をしました。

《寄せられた感想》

・日本では考えられない環境があり、きちんと考えていかないといけないと思った。
・ディスカッションに向けてあらゆる視点から考えること、ほかの考えと結び付けて共有点を探すことが問題解決につながるのだと気づかされた。
・今あるすべての問題点を個別としてではなく共通の問題点として少しずつ解決に向かうよう努力したい。
・国際活動についてとても興味を持った。私も、実際に行動を起こしたい。等

《報告会を終えての感想》

全校生徒の前での発表はすごく緊張しました。でも、感想の中に何か行動を起こしたいと書いてくれている子が数名いて、私に続いて次のプログラムで参加する子が出てきてくれたら嬉しいなと思いました。また、経験をするだけでなく次につなげていくことが大切だと実感し、これからもたくさんのことに目を向け行動し発信していこうと思います。

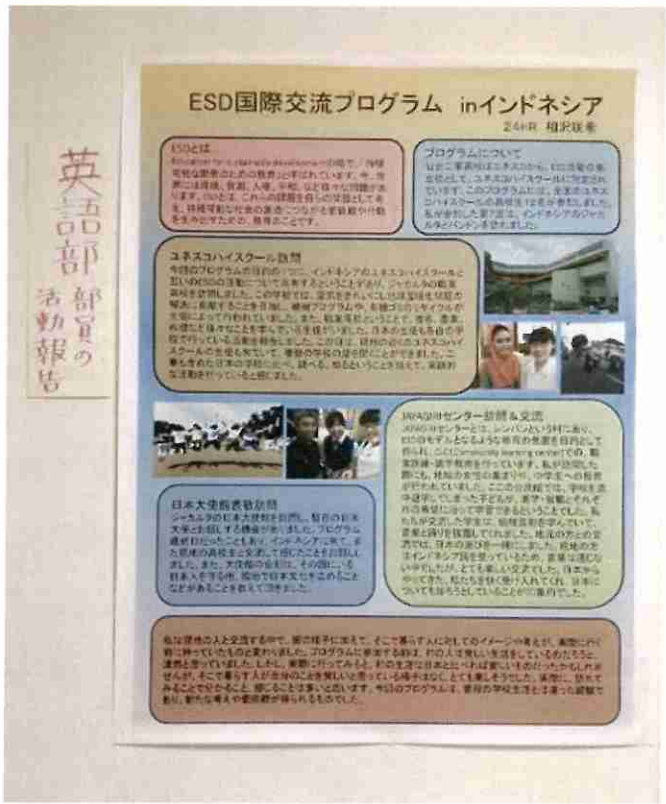
宮城県仙台二華高校
相沢　咲希

《報告会実施内容》
日時：平成２９年　９月２日、３日
場所：宮城県仙台二華高校
概要：英語部員を対象としたポスター発表
　　文化祭一般公開でのポスター展示

学校の文化祭で、私の所属している英語部の模擬店スペースに展示しました。英語部の模擬店では、販売の他に、国際理解に関するパネル展示などを行っています。私の学校の文化祭には、様々な世代の方が訪れますが、特に、小学生・中学生に国際交流の楽しさを伝えたいと思い、今回インドネシアを訪れての率直な気づきや、驚きを書くよう心がけました。

《寄せられた感想》
一般の方の中には、仙台二華高校がユネスコスクールに指定されていることや、ＥＳＤというものについて知らない方も多かったので、質問をいただきました。特に、二華中学校、高校に入学したいと考えている、小学生・中学生はユネスコスクールの活動について多く質問されました。
感想としては、「レンバンという村で現地の方と交流したのが楽しそうだった」「自分もインドネシアに行ってみたいと感じた」「インドネシアのユネスコスクールで行っているような環境保護活動を、課題研究の授業やその他の学校の活動でやってみたい」などがありました。

《報告会を終えての感想》
今回の経験をこれからも自分の糧としていくと同時に、より多くの人に伝えていきたいと思います。
今後もＥＳＤプログラムに多くの高校生が参加し、この素晴らしい体験をして欲しいです。



福島県立安達高等学校
安田百花

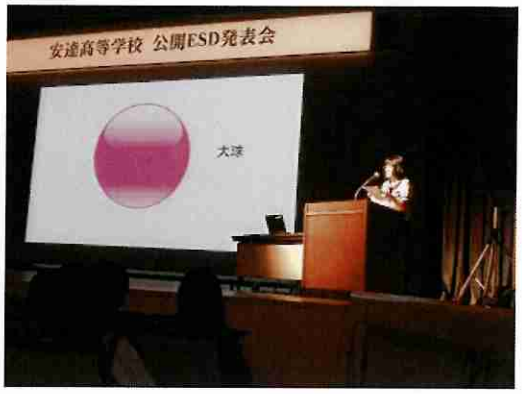
《報告会実施内容》
日時:平成29年9月6日　水曜日
形式:安達高校ESD発表会　全校生、来賓の方に対して

私は今回発表する前まで、今まで自分がやってきたことやインドネシアでの経験を話すことが何のためになるのだろうか？と疑問を持っていた。途上国に興味がある人がほとんどいない状況で何を伝えたら分かってもらえるのか、途上国の悪い面だけ受け取って、私の発表をきっかけに途上国を嫌いになって欲しくないという気持ちもあった。発表内容を考えるのに迷うところも多々あったが、インドネシア出身の日本語が話せる通訳のあゆさん（Rahayu Rahman）から詳しく聞いたことを例にインドネシアの教育、ごみ問題についての現状についても伝えた。また、一緒に参加していた同年代の高校生はみんな異なった視点で物事を見ており、私自身の視野を広げる機会になった。交流が広がることも参加をするメリットであること、今の時点で、話題に出来るような活動をしていなくても、みんなに等しくESD国際交流プログラムに参加するチャンスはあるということを話した。そしてこれまでの経験から、一つのことができるようになるにはたくさんの時間がかかるということを実感した。時間をかけて一歩一歩進みながら成長していきたいという思いを伝えて報告会での発表を終えた。

《寄せられた感想》
「みんなにチャンスはある」と感想用紙にメモをとって、ちゃんと聞いてたよと言ってくれる人や「出来ると思っていたことが出来ない」という言葉が印象的だったと書いてくれる人がいた。まさに、私が伝えたかったことをピンポイントで受け取って心に留めてくれる人がいることにとても驚き、感動した。

《報告会を終えての感想》

私は、発表をすると緊張をして手がとても震える。案の定、今回の発表でも手は震えたが、初めて発表している最中が楽しく感じた。途上国に行って課題を解決したいという将来のことについて話していたからかもしれないが、発表しながら、伝えることや知ってもらうことの楽しさを知った。今回発表することで私自身も気づいていなかった自分のことや成長について気づくことが出来た。良い発表をすることが出来てよかったと感じている。



群馬県立利根実業高等学校
萩原　健輔

《報告会実施内容》

私は、5月20日に日本ユネスコ協会連盟の評議員会で報告を行いました。報告した内容は、主にインドネシアで私たちが見学させていただいた場所の説明、インドネシアの学生の発表を簡単にまとめたもの、そして私がインドネシアで学び考えたことについて報告させていただきました。

《報告会を終えての感想》

今回、ESD国際交流プログラムでリーダーを務めたことから、東京の大手町で開かれた評議員会にて事後報告会をさせていただきました。今まで、同年代の方に発表することには慣れていた私ですが今回は、全国のユネスコ協会の方々だったので、とても緊張しながら発表を行いました。緊張のため、たじたじになってしまいましたが私の話を最後まで真剣に聞いていただけたので、とてもうれしかったです。ESDの活動は、ここで一旦幕を閉じますが、完全に終わってしまったわけではありません。来年度からは、大学に進学する予定です。そこで今回の研修を生かして、国際関連のボランティアや国際交流を続けていきたいと私は考えています。

6. その他

■2017.4　UNESCO ジャカルタ事務所　ホームページ

http://www.unesco.org/new/en/jakarta/about-this-office/single-view/news/sdg4_international_exchange_program_on_esd_from_japan_visit/

UNESCO » Office in Jakarta » About this Office

Home　Areas of Action　About this Office

About this Office

- Office Functions
- Funds in Trust
- Regional Networks
- Who's Who
- Contact Us
- News Archive
- Publications
- Vacancies

06.04.2017 - UNESCO Office in Jakarta

SDG4: International Exchange Program on ESD from Japan visit UNESCO Jakarta

UNESCO Jakarta welcomed the visit of twelve high school-students from Japan on Thursday, 30 March 2017. The students are the winners of an Essay Competition on Education for Sustainable (ESD) organized by the National Federation of UNESCO Associations in Japan (NFUAJ).

NFUAJ is a non-governmental organization founded in 1948 in order to promote UNESCO activities on a grass-root level in Japan based on international solidarity and cooperation in the spirit of UNESCO Constitution. The visit to UNESCO Office aimed for the students to learn about good practice and examples of ESD activities implemented by UNESCO in Indonesia in particular the Green School Initiative.

Mr. Gunawan Zakki, National Program Officer for Education, welcomed the delegate on behalf of the Director and Representative of UNESCO and presented the experience of UNESCO in the implementation of Green School and Climate Change Education in Indonesia.

The students also had the opportunity to present their projects on ESD in the areas of Food waste, Environment, Water and Energy for Sustainable Development. Miss Misaki Kagawa from Hiroshima, Miss Sayo Ishihara, Miss Saki Aizawa and Mr Soma Yamane presented their projects respectively on (1) No food-waste campaign at school, (2) Let Fireflies alive, (3) social impact of water dam's construction, and (4) Sustainable Development versus Recycle-able Development.

Dr. Ai Sugiura, Programme Specialist for Science Policy and Capacity Building also explained UNESCO Natural Sciences Program and the role of the Regional Science Bureau for Asia and the Pacific. She emphasized on the interlinked aspects of environmental and development issues and introduced the nexus approach especially while considering food, water and energy issues for a take home message for the students to their respective schools while considering sustainable development.

UNESCO RESOURCES

- Photobank
- Conventions & recommenda
- Publications
- Statistics

■ＡＮＡ機内誌 2017 年 7 月号

全日本空輸株式会社様のご協力により、機内誌「翼の王国」にて本プログラムが紹介された。

ANA GROUP INFORMATION TOPICS

●ニュース

次世代育成にむけたCSR活動報告

ANAグループでは、子どもたちが未来を切り拓く力を身につけるための継続的な支援活動を行っています。

●ANAは「ESD国際交流プログラム」に協力しています

ANAは、UNESCO（国連教育科学文化機関）公式サポーターとして、ESD（持続可能な開発のための教育）の普及を目的に行っている「ESD国際交流プログラム」（主催:日本ユネスコ協会連盟、協力:三菱東京UFJ銀行）に協力しています。3月25日（土）～31日（金）に実施された「第7回ESD国際交流プログラム」に参加した日本の高校生12名がANA便に搭乗しました。インドネシアのユネスコスクール*の生徒とディスカッションなどのプログラムを通じてESDに関する理解を深めた参加者たちは、帰国後に今回得た気付きや学びを活かし、学校や地域において主体的にESDの実践に取り組んでいます。

ANAは今後もUNESCO公式サポーターとして、UNESCOや日本ユネスコ協会連盟の活動を支援してまいります。 *UNESCO憲章に示された理念を学校現場で実践するための世界的なプログラム

ESD国際交流プログラム

●独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の活動を支援しています

ANAグループは、独立行政法人日本学生支援機構の「未来を担う人材を育成する」活動に賛同し、学生の皆さんの自立と挑戦を応援しています。

JASSOの学生支援寄附金事業

- **JASSO支援金：**自然災害等により学校生活を送ることが困難になっている学生・生徒が、1日も早く通常の学校生活に戻り学業を続けられるよう支援金を支給します。
- **優秀学生顕彰：**経済的な理由により修学に困難がありつつも優秀な業績を挙げた学生・生徒を表彰します。
- **給付奨学金：**経済的に修学に困難がある特に優れた学生・生徒に、給付奨学金を支給します。

詳しくは学生支援寄附ページ（www.jasso.go.jp/sp/about/kihukin/shien_kihu.html）をご覧ください。

平成28年度優秀学生顕彰
スポーツ分野大賞 畠山愛理さん

▶詳しくはANAウェブサイト（www.ana.co.jp）をご覧ください。

主　催

National Federation of
UNESCO Associations in JAPAN

公益社団法人 日本ユネスコ協会連盟

協　力

三菱東京UFJ銀行

株式会社三菱東京UFJ銀行

問い合わせ窓口

公益社団法人日本ユネスコ協会連盟事務局　ESD 国際交流プログラム担当
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 1-3-1 朝日生命恵比寿ビル 12 階
Tel: 03-5424-1121　　Fax: 03-5424-1126
http://www.unesco.or.jp